

若者のページ

Hi!

楽しむ

防災身近に 熊大生がアイデア

教訓継承へ子どもにも避難所体験

いかに楽しく防災への意識を持ち続けるのか。子どもたちが避難所運営などを宿泊体験する「防災グランピング」を盛り込んだ政策を熊本大(熊本市中央区)の学生たちが提案している。熊本地震や熊本豪雨の教訓をつないでいくためのユニークなアイデアで、被災地研修のビジネス展開も視野に入れている。

同大熊本創生推進機構の田中尚人准教授の研究室で土木などを学ぶ学生5人。昨年、県内の大学生が熊本地震の記憶継承に取り組む「水の国くまもと未来予想図プログラム」(サントリホールディングス・熊日共催)に参加した経験を生かして政策を立案。同大の公共政策コンペで提言し、グランプリの熊大賞に輝いた。

小中学生が主役 運営や炊き出し

政策のタイトルは「笑ってノナえて!」。多発する災害への備えに日ごろの訓練が欠かせないが、「やされ感もあり、持続するためのハードルは高い」と考えた。その課題を解決し、楽しく学ぶ手段として小中学生の宿泊体験「防災グランピング」を思い付いた。避難所の運営や炊き出しを子どもたちが主役となって作り上げる。食材は非常食を積極的に活用することで期限切れを防



防災について楽しく学ぶ政策を作った熊本の学生たち

ぐ。日常的に食べた分の補充を繰り返して備蓄する「ローリングストック」の考え方を学ぶ狙いだ。被災者の体験を聞く機会も。同大大学院1年の佐々木和さん(23)は「防災を身近に感じてもらうためには、まずは実際に触れてもらう」と説明した。防災グランピングを土台にして、子どもたちがボスターや絵本を作成する案も盛り込んだ。メンバーの中には熊本地震の経験者も。3月に大学院を卒業

県内外から集客 ビジネス展開も

被災地域で防災グランピングを活用し、県内外から集客しビジネスにつなげるアイディア。大学院2年の竹原大康さん(23)は「新たな価値を生み出し、持続可能なプログラムにしたい。公共施設を活用し、修学旅行などを誘致できるのではないかと話した。

政策実現には、「学校などの取り組みを小さく始めて機運を高める必要がある」とメンバー。提案に興味を持った自治体などには応じてほしいという。

南阿蘇村の吉良清一村長は「学生たちが震災の記憶の継承と地域の活性化を結び付けて考えてくれたことがうれし。村内では震災ミュージアムの整備も進んでいる。民間の宿泊施設と協力することで、提言を生かした新たな魅力を創り出せるのではないかと興味を示している。(藤山裕作)



防災や商店街活性化などについて若者たちが提言した公共政策コンペ = 昨年11月、熊本市中央区